わが市を語る 1

「人にやさしいまちづくり」に向けて

深川市（北海道）

深川市長　田中昌幸（たなかまさゆき）

はじめに

深川市は、北海道のほぼ中央、札幌市から北へ100㎞、旭川市の西隣に位置し、鉄道や北海道縦貫自動車道、国道など交通の要衝にあり、周辺地域を含む農業地帯を背景に流通サービスの拠点として、農業を産業の柱に発展してきました。

北海道の母なる川、石狩川水系の肥沃な土地と気象条件に恵まれ、稲作、畑作、野菜、果樹、花卉、畜産など幅広く農畜産物を生産し、北海道内有数の食料基地として重要な役割を果たしています。

中でも稲作は、作付面積、収穫量とも北海道179市町村中第2位を誇り、生産性や品質の面でもトップクラスに位置付けられており、おいしいお米作りに向けて生産者・農業団体・行政が一丸となってさまざまな取り組みを進めています。そんな米をテーマとした道の駅「ライスランドふかがわ」は、毎年100万人が来場する人気スポットとなっており、採れたての野菜・果物や精米したての米などの特産品販売コーナーや、炊きたての釜飯が自慢のレストランなどで地域の魅力に触れていただくことができます。

また、全国第2位の生産量を誇るソバのほか、明治時代から栽培されているリンゴを活用し、リンゴと酵母だけで造るふかがわシードルは新たな特産品となっています。

そのほか夏から秋にかけて旬のフルーツ狩りが楽しめる観光果樹園や、温泉、オートキャンプ場などにも、多くの観光客や地域の方々が訪れます。

早くからスポーツ都市宣言のまちとしてスポーツも盛んで、ナイター設備付きの陸上競技場や温水プールなどを活用した合宿招致に取り組むなど、関係人口の拡大も進めています。

深川市の田園風景

年間100万人が訪れる道の駅ライスランドふかがわ

深川産リンゴ100%で造るふかがわシードル

五輪出場選手も参加するホクレンDC深川大会

人にやさしいまちづくり

私がまちづくりで一番大切に考えていることは「人」です。人はまちの宝物と考え、子どもや高齢の方、障がいのある方をはじめ、「人」にやさしい施策に取り組んでおります。

「やさしいまち」とは、みんなで支え合い、助け合える居心地のよいまちです。誰一人として取り残

されることなく、包み込む、何かあったときにお互いさまと言える、そんな「人にやさしいまちづくり」を市民の皆さんと一緒に進めます。

こどもまんなか社会の実現に向けて

少子化対策の強化として、こどもまんなか社会の実現に向けて、子どもや若者の健やかな成長を地域社会全体で後押しするため、本年2月に「こどもまんなか応援サポーター」宣言をし、子育て応援プロジェクトの柱として「こども・子育て条例」を新たに制定することとし、子どもの意見を直接反映したものとなるよう取り組んでいます。この動きに先がけて、生後1カ月のお子さんが受診する1カ月児健診の費用助成を新たに実施するとともに、出産時の移送にかかるハイヤー料金の全額を助成、「妊娠・出産応援交付金事業（愛称：コウノトリ応援プラン）」で、第1子・第2子は33万6000円、第3子以降53万6000円を交付、「特定不妊治療費助成事業」で、3万5000円を上限とした自己負担の7割を助成するなど、子育て世帯の経済的負担の軽減と妊娠・出産から子育てまで切れ目のないサポートを続けていきます。

こどもまんなか応援サポーター宣言

このほか、これまで中学生以下の医療費自己負担分の全額助成を、本年8月からは高校生まで拡大、学校給食費の無償化を半年へ拡大するとともに、学校給食費の増額改定分を市が負担し、併せて、保育園および幼稚園などの副食費についても、半年間の助成へと支援を拡充しています。

また、全国に比べ北海道での整備が遅れていた、市内8小中学校のエアコン設置は、本年度で整備を完了しました。

今後ともこれらの施策により若い世代の結婚や子育ての希望をかなえる環境を整えていきたいと考えております。

持続可能なまちづくりと積極的な情報発信

SDGsの推進や、DXの推進、気候変動問題への対応など、持続可能なまちづくりに関連する取り組みとして、令和5年3月に「ゼロカーボンシティふかがわ」を宣言し、公共施設の照明灯のLED化や庁内会議資料のペーパーレス化などを進めております。また、本年3月には「深川市パートナーシップ宣誓制度」を導入し、誰もが自分らしくいきいきと輝く、多様性を認め合う社会の実現を目指しています。

情報発信においては、「市公式LINE」を令和5年8月に開始し、市民ニーズに合わせた情報を収集しやすい環境を整えました。

市の取り組みやイベント情報を、市公式ホームページで発信するほか、私も率先してSNSのさまざまなツールを活用し、市内外の皆さんに情報発信していくことで、「行ってみたい」「住んでみたい」「住み続けたい」と思っていただけるようなまちを目指し、市民の皆さんと共にまちづくりにまい進してまいります。

プロフィール

◆面積　529・42㎢
◆人口　1万8437人
◆世帯数　1万302世帯

〔将来都市像〕豊かな自然と暮らしが調和した　田園都市　ふかがわ

〔まちの特徴〕北海道のほぼ中央に位置し、石狩川と雨竜川流域に広がる肥沃な大地の恩恵を受けた、農業を基幹産業としたまち

〔特産品〕米、ソバ、ふかがわシードル

〔観光〕カタクリの里「丸山公園」、桜山公園、鷹泊自然公園

〔イベント〕ふかがわ夏まつり、ふかがわまんなかフェスティバル、ふかがわ氷雪まつり

深川市長
田中昌幸

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 2

誰もが住みたい、住み続けたいと思えるまち 結城市

結城市（茨城県）

結城市長 小林（こばやし） 栄（さかえ）

市庁舎と街並み

ユネスコ無形文化遺産「結城紬」

結城市は、首都圏から70㎞圏内にあり、茨城県西北端で栃木県との県境に位置し、新4号国道と国道50号バイパスが交差する交通の要衝にあり、茨城県の西の玄関口になっています。中世城下町の町割りがそのまま残る北部市街地、結城駅南部地区から北西部地域に広がる良好な住宅街、中央部に位置する工業団地、そして南部に広大な農地が広がり、大変バランスの取れた環境となっております。

本市を代表する地場産業「結城紬（つむぎ）」は、日本最古の歴史を有する高級絹織物で、全ての工程を現在も手作業で行っており、その中でも「糸つむぎ」「絣（かすり）くくり」「地機織り」の三工程は昭和31年に「国重要無形文化財」、昭和52年に「伝統的工芸品」に、そして平成22年には「ユネスコ無形文化遺産」に登録され、後世に伝え残さなくてはならない貴重な財産であり、大きな魅力でもあります。また、農業も盛んであり、首都圏に向けて新鮮な野菜（トウモロコシ・トマト・レタス・白菜など）が出荷されております。

「新3K宣言」

第6次結城市総合計画では、「みんなの想いを　未来へつなぐ　活力あふれ文化が薫るまち　結城」を将来都市像と定め、歴史や伝統、自然環境などを次代に継承しつつ、地域資源として活用しながら、魅力と個性あるまちを新たに創造していくことを目標としています。

令和6年3月、本市は市制施行70周年の節目を迎えました。この先、100年、200年と繁栄を続けるために、守るべきものは守り、変えるべきものは変えていく必要があります。

そこで、掲げたのが「健康（KENKO）」「教育（KYOIKU）」「経済（KEIZAI）」三つの柱となる事業の頭文字をとった「新3K宣言」です。

「健康寿命日本一」を目指して

一つ目は、全ての源である「健康」の確保です。「市民の健康を守ることこそが全ての幸福の前提となる」との考えから健康寿命日本一を目指しています。幼児から子ども、青年期の現役世代、高齢者まで全ての市民が健康を意識し、より一層人生が豊かになるよう、個人ごとの健康増進・維持プログラムの導入や、健康診断の受診率の向上、介護や医療の充実はもとより、地域に根差した介護予防事業を展開できる体制づくりに努めています。

現在、本市の介護保険料は、茨城県内でも一番低額な自治体となっています。これもひとえに、市民の皆さまの健康に対する意識の高さに加え、健康づくりやシルバーリハビリ体操などの介護予防

への取り組みのおかげだと思っております。

本年度から、さらに市民が健康づくりに積極的に取り組んでもらえるよう自身の健康状態を定期的に確認するための「血圧計」や手のひらをセンサーに約30秒当てるだけで推定野菜摂取量が測定できる機器「ベジチェック®」などの健康機器を市役所や市内各所に設置いたしました。

イベント「きものday結城」の風景

子どもこそ未来をつなぐ財産

二つ目は、「教育」の充実です。「子どもこそまちの未来をつなぐ最も大切な財産」という考えのもと、無限の可能性を持つ子どもたちの個性を伸ばし、才能開花の一助となるような教育環境の整備を進めます。現在進めている小中一貫校整備については、地域資源を生かした魅力的な教育カリキュラムの導入に加え、既存集落における地域指定の導入などの周辺環境整備、さらに卒業後に市内在住や市内企業への就職など、一定の要件により返還免除となる奨学資金制度を導入するなど、「移住・定住」を含めた活性化につながるような「教育を核とした地域づくり」を進めているところです。

持続可能な農業・工業・商業の振興

三つ目は、前述の二つの柱を進めるため、また、継続的な各種事業を進めるために必要な自主財源となる「経済」の進展です。本市の主要産業である農業をより充実させるため、基盤整備や農地の集約化を進める一方で、小規模でも無農薬野菜などの付加価値のある作物栽培が可能な農業形態を模索しております。

また、現在進めている「結城第一工業団地繁昌塚南地区」については、早期整備と優良企業の誘致により、新たな雇用の確保と地域経済の発展に寄与するものと考えております。

商業では、ユネスコ無形文化遺産である結城紬をはじめとする地場産業、結城家ゆかりの寺院や見世蔵などの地域資源を活用し、商業と観光の一体的な活性化を図ってまいります。

少子高齢化や人口減少、不安定な社会情勢や物価高騰など、地方自治体を取り巻く環境は大変厳しいものと認識しておりますが、こうした中においても、市民の皆さまと共にこの難局を乗り切り、誰もが住みたい、住み続けたいと思えるまちづくりを進めてまいります。

城下町の風情が残る「見世蔵」

プロフィール

◆**面積** 65・76㎢
◆**人口** 4万9632人
◆**世帯数** 2万1504世帯

〔将来都市像〕 みんなの想いを　未来へつなぐ　活力あふれ文化が薫るまち結城

〔まちの特徴〕 美しい自然とゆたかな歴史・伝統に恵まれたまち

〔特産品〕 結城紬、桐下駄、桐箪笥（たんす）、トウモロコシ、トマト、レタス、白菜、みそ、しょうゆ、地酒、ゆでまんじゅう

〔観光〕 見世蔵、結城蔵美館、結城市伝統工芸館

〔イベント〕 結城夏祭り、祭りゆうき、きものｄａｙ結城、北関東中学校野球大会、結城シルクカップロードレース大会

結城市長
小林　栄

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 3

下田市（静岡県）

下田市長　松木正一郎

〝グローカルシティ〟下田市の挑戦

黒船祭公式パレード

下田市は、静岡県の伊豆半島南端近くに位置することから、古くから東西海上交通の要衝として形成された港町でした。江戸時代には海の関所「御番所」が置かれ、「出船入船三千艘」のにぎわいだったと下田節にうたわれています。この港に幕末の嘉永7（1854）年、ペリー提督率いる黒船が来航し、下田は日本で初めて海外に港が開かれたのでした。

それを記念して、本市では毎年5月に「黒船祭」が開催されています。米海軍や大使館、外務省や自衛隊など多彩なVIPを乗せたオープンカーがまち中をパレードし、子どもからお年寄りまでたくさんの市民や水兵さんたちが参加してさまざまな国際交流の輪が生まれる、「グローカルシティ」下田市が誇る一大国際イベントです。

また、市内には白浜海岸をはじめ、10カ所のビーチがあります。エメラルドグリーンに輝く海の美しさに国内外から毎年数多くの海水浴客が訪れます。さらに、本市はサーフィンやライフセービングの聖地でもあり、下田中学校サーフィン部では国内外のトップサーファーとの交流も行われています。

そのほか、国際カジキ釣り大会も毎年下田で開催されており、100チーム以上のクルーザーが港に集結する圧巻の風景は、夏を告げる下田の風物詩です。

白浜大浜海岸

攻めの防災

一方で、南海トラフ巨大地震による津波の脅威は本市の最重要課題です。もし発生したときは、海に近い中心市街地に甚大な被害が想定されることから、できるだけ早期に復興できるよう、万が一に備えてあらかじめ復興まちづくりの方向性を市民と共有しておこうと、2年以上かけてシンポジウムやワークショップなどを重ね、本年7月に「下田市事前復興まちづくり計画」として取りまとめました。

この計画は、本市の現状や課題を整理した上で復興まちづくりの方針を示す「復興ビジョン編」、復興まちづくりにおける住民・事業者・行政の役割分担や体制、手順を示す「復興プロセス編」、復興のビジョンとプロセスの検討を踏まえて平時からの取り組み事項を示す「事前の準備編」の三つで構成されており、本市の上位・関連計画の内容やワークショップでの市民意見などにも配慮して、複数の復興パターンを示しています。

今後は、住宅の耐震化など従来型の防災対策はもとより、その一歩先を見据え、あらゆる課題を掘

り起こして「攻めの防災」を展開してまいります。

ウォーカブルなまち

ヨーロッパの都市のように、というと少し大げさですが、本市には旧市街が保存されています。「旧町」と呼ばれるそのエリアは、江戸時代に形成された町割りで、碁盤の目状に交差する路地の中には、あえて直進できないように作られた矢折れ（クランク状）の交差点などもあり、観光客に人気のペリーロードなど、幕末の面影を残す街並みそのものが一つの観光資源です。

しかし、バブル崩壊以降、まちなかの商店が次々とシャッターを下ろすようになり、にぎわいが失われてきていました。そこで、令和4年度から空き店舗を活用して出店する際の改修費補助制度を開始したところ、これまでの2年半でなんと約40件の申請があり、今、商店街のシャッターが次々と開き、UターンやIターンによる新たなにぎわいが生まれるようになりました。

また、本年11月には「全国路地サミット2024.in下田」が旧町で開催されます。全国各地から多くの路地のファンや有識者が集いますので、ぜひお越しください。皆さんと交流し、学びながら、歩いて楽しい（ウォーカブルな）まちとして、さらに魅力を増やしていきたいと思います。

ペリーロード

市内小学校での日米交流会

つながる下田 新しい未来

第5次下田市総合計画に掲げた本市のまちづくりの理念は、「時代の流れを力に　つながる下田　新しい未来」です。人口減少社会においても、人と人、行政と企業、都市と地方など、さまざまなものが「つながる」ことで、これまでにない新たな価値を創出し、コンパクトでハッピーなまちづくりを目指していきます。

また、最近は世界各地から文化研究者や環境研究者にお越しいただき、地元の小中学生とさまざまな交流を進めています。地元を愛する心を抱きつつ（ローカリズム）、地球規模で活躍できる（グローバリズム）、そんな「グローカル人材」を育てることで「新しい未来」を訴求していきたいと考えています。

伊豆半島の先端の小さなまち下田市ですが、多様なモノ・コト・ヒトとつながり、国際的な観光文化都市としてそのブランド力を高め、国内外の人々の憧れを呼ぶようにする。このミッションに市役所全庁を挙げて取り組んでまいります。今、これをお読みの皆さまともぜひつながれたら、と心よりお願い申し上げます。

プロフィール

◆面積　104・38㎢
◆人口　1万9442人
◆世帯数　1万403世帯

〔将来都市像〕幕末の街並みを生かしたコンパクトな国際観光文化都市
〔まちの特徴〕黒船来航による開国の歴史が漂う港町
『伊豆の踊り子』のラストシーンでも有名

下田市長
松木正一郎

〔特産品〕キンメダイ、ところてん、ニューサマーオレンジなど
〔観光〕ペリーロード、了仙寺、玉泉寺、白浜大浜海水浴場、下田公園、爪木崎、龍宮窟、下田海中水族館など
〔イベント〕黒船祭、あじさい祭、アロハシャワー、下田太鼓祭り、国際カジキ釣り大会、水仙まつりなど

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 4

小松島市（徳島県）

小松島市長　中山俊雄

未来へ輝く希望と信頼のまち「こまつしま」を目指して

小松島市は、徳島県東部の沿岸に位置し、紀伊水道を臨む形で広がる徳島小松島港という良港を持つ港湾都市として発展し、かつては「四国の東門」と呼ばれ、四国と関西を結ぶ旅客船などが発着していました。市中央部には南北に向かう国道55号が通っており、徳島阿波おどり空港やJR徳島駅からのアクセスも比較的簡単な立地になっています。

港地区を熱気で包む「こまつしま秋の阿波踊り」

源義経ゆかりの地をめぐる義経ドリームロードをはじめ、四国八十八ヶ所霊場18番札所「恩山寺」、19番札所「立江寺」やスタジオジブリ『平成狸合戦ぽんぽこ』のモチーフとなった民話「阿波狸合戦」に出てくる金長たぬきを祀った金長神社、世界一大きい狸の銅像である「金長たぬき像」など、本市には魅力的な観光地やイベントがたくさんあり、毎年夏には徳島小松島港の「新港岸壁」で90年近く続く「小松島港まつり」が開催され、夜空を彩る打ち上げ花火を市内外の皆さま約9万人にお楽しみいただいています。

大玉花火の連発数は四国最大級「小松島港まつり」

また、北端に連なる日峰山嶺、東端に紀伊水道と、山と海に囲まれた自然豊かな本市は、山の幸や海の幸も豊富であり、水稲を主体に、キュウリ、トマト、イチゴなどの施設園芸や畜産、中山間地でのミカン、ヤマモモなどの果樹など多様な農産物が生産されており、紀伊水道の豊かな漁場では、シラス、ハモ、太刀魚など多くの水産物が取れており、季節ごとに新鮮な食材に舌鼓を打つことができます。

港町ならではの特色を生かしたまちづくり

本市は東四国の玄関口や物流と人流の結節点として重要な役割を担ってきましたが、国鉄小松島線の廃止や明石海峡大橋開通によるフェリー航路の移転などの影響により、港周辺の本港地区は、かつてのにぎやかさを失ってきました。

このような事態から脱却するため、市の面積が45・37㎢であるというコンパクトさを生かし、生活に必要な都市機能が集約した中心市街地の再生に取り組み、現在では、市立図書館や教育委員会、保健センターなどさまざまな都市施設設備をはじめ徳島赤十字病院を核とした福祉・教育・医療・就労の

観光PRマスコットキャラクター金長たぬき「こまポン」と豪華客船

一大総合支援ゾーンを形成するとともに、重要港湾・徳島小松島港小松島地区港は現在も、コンテナターミナルや10万t級のクルーズ船も停泊する四国を代表する港となっています。

さらには、徳島南部自動車道の整備により、今後、インターチェンジが市内に2カ所供用される予定となっており、関西圏からの移動時間が大幅に短縮され、交流人口の増加などにつながる絶好のチャンスと捉えています。

現在、本港地区は、ウッドデッキやボードウォークなど公園施設が併設され、海風を感じられる憩いの場となっていますが、さらなる人の流れを生み出し、にぎわいを取り戻すため、令和6年2月には国鉄駅跡地に整備された小松島ステーションパーク・SL記念広場にインクルーシブ遊具を設置し、連日、子どもたちの声があふれています。

子どもたちの声があふれる「SL記念広場」

また、たぬき広場と市立図書館との接続エリアにおいて、アウトドア・テラスの整備を進め、木陰で読書などを楽しむことのできる癒やしの空間を構築し、港を中心とした、子どもから若い世代、高齢者まであらゆる世代が集い、自然と笑顔になる場所や機会を創出していく予定としています。

ここぐらし（ここで、ずっと、暮らしたい）と思っていただけるまちづくり

本市では〝ここで、ずっと、暮らしたい〟そう思ってもらえるまちを目指し、出会いから結婚、出産、子育てまで各ライフステージに合わせた切れ目のない支援を通して、市民の暮らしをサポートしています。

「ここぐらし」の取り組みの一つである「ここで、はたらく」として、小松島市に住み続けながら、全国の会社にオンラインで従事でき、テレワークなどの多様な働き方を支援するため、リスキリング推進事業にいち早く取り組んできました。

市民向けにデジタル学習や講座の開催、企業でのリモート体験ができるインターンシップの導入などの支援を積極的に行うことにより、結果としてテレワークによる在宅就労の実現につながっています。

小松島を守り抜く

今後も、豊かな自然環境や港町である特色などを生かしながら、人口減少対策をはじめとするさまざまな施策を展開し、そして推し進めていくことで、持続可能な、明るく、未来につながるふるさと「小松島」を守り抜くために取り組んでまいります。

皆さま、お近くにお越しの際は、ぜひ「小松島市」にお立ち寄りいただきたいと思います。

プロフィール

◆面積　45・37㎢
◆人口　3万4851人
◆世帯数　1万7166世帯

〔将来都市像〕未来へ輝く希望と信頼のまち「こまつしま」

〔まちの特徴〕四国の東門と呼ばれ、四国と関西を結ぶ小松島港を中心に栄えてきた港町

〔特産品〕ハモ、ちりめん、ちくわ、スダチ、ヤマモモ、温州ミカン、シイタケ、花火、フィッシュカツ

〔観光〕立江寺、恩山寺、たぬき広場、SL記念広場、義経ドリームロード、あいさい広場、金長神社、金磯弁財天

〔イベント〕小松島港まつり、こまつしま秋の阿波踊り、小松島「逆風」ハーフマラソン、小松島金長狸まつり、小松島みなとマルシェ

小松島市長
中山俊雄

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。